



もど子と人婦

號九第卷五第

もど子

小さい別嬪さん(ういさ)

やまとの翁

大層な響をさせて出て来た彼の
 怪獸を一目見て、「別嬪さん」は、
 大方氣を失ふまでに吃驚しまし
 た。

大抵の娘でしたら、屹度恐ろし

さに齒の根も合はないで、ぶる／＼戰慄えて許り居るのでせうが、この娘は、中々利かん氣ですから、態と恐ろしい様な風は少しも見せませんで、ちゃんと構えて居りますと、怪獸は、どしん／＼と側まで寄つて來て、

「おい、お前こゝへは、自分から來るといつて來たのか

と聞きますから

「そうですとも、

と答へますと、

「うん、夫なら中々豪い、中々賢い娘だ、己に取つてもありがたい譯だ、お禮をいふよ」

恐ろしい怪獸の言ふことにしては、何といふ柔しい言葉だらうと、

妹娘はいっそ
不思議に思ふ
位くらゐでした。す
ると怪獣おぼけは
「夫おれでは、向むか
ふの室むろにお前まへ
さんの寢床ねどが
あるから、今いま
夜よは、そこに
行いって、ゆっ
くりと休やすむが



よい
「
と置いて置いて、
其儘あま出て行きま
した。
夫おれで、娘むすめは、其その
室むろに行いって見みま
すと、そこには
今迄いままで見た事こともな
い位の立派うつくな装
り物ものなどがあつ
て、夜具よぐだの蒲ふ

團だのは目の醒める程奇麗なのです。

「あの怪獸は、今夜丈私を生かして置いて、明日になったら屹度殺して喰べようと思ってるのだよ」

と思ひながら、床の中に這入りましたが、さて、これつきり、もうお父さまに遭ふことも出来ないのかと思ふと、悲しくってくとも眠り所でもありません。しかし其中にだんく勞れが出て来て、何時か知らん、とろく眠ったかと思ふと、誰だか耳の側で、まことに柔しい清らかな聲でおこして居ます、はっと思つて目が醒めて見ると、それはく美しい神々しい一人の天女が枕元に立って居られるのでした。

「お前、決して悲しまなくつてもいいのだよ、お前の平生からの

心掛のよいことや、お父様に孝行なことは、ちゃんと私が知って居ます、何れよい報があるに違ない」

といふかと思ふて、天女の姿は消えて仕舞ひました、然しこれは夢でありました。あくる朝になって、眞實に目が覺めてから

「あら、夢だったよ、夫にしても何だか不思議な夢だこと」

と思つて、少しは心丈夫になりました。さて起きて見ると、又朝飯がちゃんと出来て居ます、朝飯がすんでから、まあ一通り御殿の様子を見物しようと思つて、そこいらを歩き廻はつて見ますと、何處も此處も、立派なこと、言つたらとても口に言ふことも出来ない位、其中に不圖、或室にきますと、「小さい別嬪さんの室とかいた札が出て居ます」あらまあと思つて、戸をあけて這入つて見ま

すと中は一段と奇麗です、ピアノもあれば、いろいろの書物もある、お化粧の道具から、さまざまの装り物から、何から何まで見事な物許り、ちゃんと揃って居ります、

「まあ、奇麗なこと、これでは怪獣は、すぐ私を喰べて仕舞ふのでもないらしいわ」

と思つて尙よく見ると、

「悲しむことはない、恐れることはない、思ふことをいってごらん、何でも私は其通りにする

と書いて居ます、

「あら、これで見ると、怪獣は割合に親切なんだわ、けども、私、何よりか一番お父様にお目にかゝりたいのだから」

といつて、ちよいと、壁にかゝつて居る大きな鏡を見ますとこれは不思議、心配さうに俯きながら馬に乗つてお家の前に着いたお父様の姿が、其儘映りました。

「あらっ」

と思はず、側に寄つて尙よく見ますと、意地悪の二人の姉さまたちが、家から出てお父様を迎へて居ます、そして二人とも心配相な顔付して居ますが、心の中では、反つて喜んで居るのが、ありありと分つて居ます。すると見て居る中に間もなくこの繪は消えて見えなくなりました。

其中に、晝時になりますと、又例の様にいろくの御馳走が用意せられて居ますし、夕方になると、ちゃんとお夕飯が出来て居ま

す、で、娘は、こんな風であつて見ると、あの怪獸は、たゞ私を喰ふ丈ではない、少しは親切な心もあるらしい、と考へて居りました。しますと、其夕方、又のさりくと大きな歩音をさせながら、恐ろしい怪獸は娘の室へ這入つてきました。娘は又今更の様に恐ろしさに胸をどきどきさせて居ますと、怪獸は、妙に優しい聲で

「小さい別嬪さん！ 卿の名は「小さい別嬪さん」といふんでせう？」

「えゝ、そうです」

「今から少しの間こゝで一所に話をしても宜でせう、若し不可なけりや、そういつてくれゝば直出て行きます」

「えゝ、可いですとも」

「然し、卿は私を大層恐い姿だと思ってるでせう？」

「眞實にそうです、私は偽いふのが嫌ですから……然しお前さんは中々親切だと思つて居ます」

「なる程……然し私はこんな怪獣なんですよ」

「然し、世の中には外形が人間であつて心の怪獣の人は澤山あります、兩方の中で私は外形が怪獣でも心の正しい方がよいと思ひます」

と申しました所が、怪獣は大層嬉しい様な顔付をして居ました。そうして居る中に十時頃になりますと、又明日來ませうといつてのつきくと歩いて出て行きました。それからといふものは、毎日く夜の七時頃になると、屹度お怪獣がやつてきて、いろく

の事を話して行きます、そのたんびに、怪獸は只の怪獸の様でな
 くて心情は中々優しい親切なものだといふことが分つてきて、お
 仕舞には、全く恐くも何ともない許りでなく、こんなに優しい心
 情でありながら、何故、あんな恐ろしい姿になつて居るのかと、
 反つて可愛相でならない様になつてきて、近頃では、お怪獸のく
 る時間が、何だが待ち遠しい様な氣がして來ました。
 其中にだんく日數が経つて、彼れこれ三月にもなりましたから、
 ある日のこと、別嬪さんは、自分の室の大きな鏡を見て、しきり
 にお父様のことを思つて居ますと、不意にお父様の姿が映りまし
 た。然し驚いたのは、お父様が非常な大病で、誰も介抱する人な
 しに、たった一人床の中で苦しんで居る風が、はつきり見えまし

たから、これは大變、急に歸って御介抱せねばならぬと思つて居りますと、丁度七時頃になつて、いつもの様に怪獸がやつて参りましたから、其事を話して、どうか暫らくお父様の所へ行かして下さいと頼みますと、怪獸も大層困つた風でしたが、やがて

「私は卿が居なくては生きて居られないんだから、眞實は歸すことが出来ないんだけども、そういうふ譯なら仕方がない、今から歸して上げよう、其代り一週間したら是非返つてきて貰はう、一週間過ぎて返らなければ、私は屹度死んで仕舞ふから、其積りで居なさい」

といふ、娘は大層喜んで、一週間には屹度歸るからといふ約束で、御殿を出ますと、何だか風にでも乗つた様な心地で、ふわーりと

瞬またく間まに家うちに着つきました。

「まあよかつた」

といふので、大急おほいそぎで這入はいって見みると、お父様おとうさまは鏡かみゆに映うつつた通り
非常ひじょうな大病たいびょうで、うんく獨りひとでうなつて居ゐましたが、小ちひさい別嬪べつひん
さんの姿すがたを見みると、いきなり病氣びやうきも何なにも忘わすれて、起おき上あつて來きて、

「おう、よう戻もどつた」

といつて、抱だきよせました。そこで、別嬪べつひんさんは、いろく介抱かいほう
しながら、今迄いままでの有様ありさまをお話はなししますと、お父様おとうさまは、一々いっく感心かんしんして
聞きいて居ゐます。そして娘むすめの風かぜを見みますと、なる程ほど、今迄いままで家うちに居ゐた
時ときとは、丸まるつきり違ちがつてまるで、お后様きさきさまの樣ように、衣き物ものから、首輪くびわ
から、目めの覺さめる程ほど立派りつぱになつて居ゐます。さて、姉様ねいさまたちは「と聞き

いて見ますと、二人とも、つい此間お嫁に行つたといふこと、然し、あの通りの性質だから、行つてから二人とも始終喧嘩ばかりして居るのだといつて、お父様は、しきりと嘆いてお話ししました。さて、「小さい別嬪さん」が一生懸命に御介抱致しました爲めにお父様の御病氣も、だんくよくなつて來ましたが、二人の姉様たちは、妹が大層立派になつて戻つたといふのを聞いて、或日のこと久しぶりで態々お父様の所へやつて參りました。そして妹の美しい姿を一目見て吃驚するやら嫉ましやらで堪りません、そこで、中々意地があるいのですから、どうにかして妹を苦しめてやりたいたいのだとだんく二人で相談をして、とうく一つの悪企を考へだしました。夫はこうなので、一週間の約束で歸つたのだから

ら、何とかして夫よりも永く妹を引っぱって止めて置かう、そうすれば、怪獸は屹度怒って妹を非道い目に遭はすに違ない、とまあこんな相談をきめて、夫からといふものは、二人の姉様たちは、前と打って變つて妹に優しくします。

かれこれして居る中に、とうとう一週間目になりましたから、「小さい別嬪さんは、お父様の側を離れるのは、如何にも悲しいのであります、あれ程怪獸に約束したのですから、仕方ありません、いよいよ怪獸の處へ歸らうとしました所が、二人の姉様たちは、「折角来たのだから、もう二三日は留っておいで、今度お別れしたら、もう遭へないかも知れぬから」などいって、いろいろ親切にとめるのです、妹娘は、姉様たちに深い企のあることゝは知

らず、夫では、こんなに親切に言ってくれるのは、平素からの意
 地悪が直ったのだらうと思つて、大層喜んで、あの約束のことも
 氣にかゝつてならないのでしたが、姉様たちの折角の親切を無に
 するのにも、困るしと思つて、夫ではといふので一日のぼして明日
 にしましたが、其日になると、又もう一日といつてとめられて、
 とう／＼十日目になりました。すると其晩の夢に、彼の怪物が一
 人お庭にうち倒れて、今にも死に相に苦しんで居る有様をはつき
 りと見ましたから、さあ心配で／＼堪らなくなりました。出る時
 にあんなに固く約束してきた事を思ふと、怪物が、どんなに自分
 を待つて居るかも知れない、歸らなければ生きて居らないといつ
 たが、夫を思ふと、夢に見た通り、眞實に死にかゝつて居るかも

知れない、まあ、あれ程自分に親切にして呉れたのに、約束を守
 らなかつたといふのは、どうしてもこれは私の方が悪いのだ、後
 れたけども、今日は直歸りませうと決心めて、大急ぎで支度して
 お父様にお別れをして家を出ますと、又風にのつた様な鹽梅に、
 ふわりと御殿へ歸って参りました。そして自分の室に這入って、
 怪獸のくるのを待って居ましたが、どうしたのか、例の時刻にな
 っても、中々やって参りません、どうも變だなと思つて、御殿中
 を探し歩いてお庭に出た所が、丁度、夢に見たと同じ様に、怪獸
 が、お庭にたつた一人うち倒れて苦しんで居ります。「これは」と思
 つて、急いで側に寄つて

「どうも遅くなつて濟まないことをしました」

といつて親切に介抱しました所が、怪獣はやつと目を開いて、「おう戻つてきてくれたか、私は、卿が約束を忘れたから、始め言つた通り、もう生きて居ない積りで、何も喰べないで死にかゝつて居るのだ、」

といひますから、「小さい別嬪さんは、何だか大層悲しくなつて」「いえ、そんなこと言はないで、どうか生きて居て下さい、これからは、もう何處へも行かないで、一生お側に居ますから」と言つたと思ふと、急に御殿中が眞晝の様に明るくなって、何處でもともなく、美しい音楽の音が聞こえて、そこいら一面に喜びの聲が湧く様に起つて來ました。そして何時の間にか、恐ろしい怪獣の姿が消えて仕舞つて、其代はり立派な宮様見た様な年の若い

紳士が立って居られます。

「おや、怪獣は何處へ行ったのでせう。

と不思議に思つて尋ねますと、

「私が其怪獣なんです」

といつて、紳士は、悪い魔神の爲めに、今迄あんな姿に代へられて、誰か心の正しい少女で親切に介抱してくれる者がある迄は元の形に歸へることが出来ない事にせられて居た事から、今迄、大抵の人は皆一目自分の恐ろしい姿を見て逃げて仕舞つて誰もきてくれるものがなかつた事などを咄して、漸「小さい別嬪さん」が來てくれたから、とうく元の形に歸へることが出来たのだといふことをこまゝと話しました。「小さい別嬪さん」は、一々吃驚して聞



いて居ましたが「まあく」といふので、御殿の中へ連れて戻りますと、そこには、何時の間にか、お父様に、二人の姉様たちも参つて居ります。これは、妹娘が始めてこの御殿へ来た晩、夢の中に顯はれた天女がこゝへ連れて参つたのであります。そこで、天女は改めて三人に向つて、

「妹娘の優しい心と行とは美しい顔形よりは、どれほど尊いか知れぬ、善い行には善い報を上げよう。そして二人の姉娘たちの悪い事は私がよく知つて居ます、其罰として、二人とも、この御門の前に石像となつて妹娘の仕合せを見て居る役になるのがよからう其代はり、悪い心を改めさへすれば、何時何時でも、元の女の形に戻してやりませう、然し、眞實のことを言へば、二人とも何時

までも、石像の儘に立って居ることになるだらうと思ひます一
と言はれました。

それから、「小さい別嬪さんは、この紳士のお嫁さんになって、い
つまでも幸福に、この御殿に住ふことになりましたが、二人の姉
様たちは、天女の言葉の様に、眞白な石像になって仕舞って、御
門の兩側に立たされました。夫でもまだ意地悪を改めませぬから、
今になっても、やっぱり石像の儘に立って居るといふことです。

(おしまひ)